

『源氏物語』における「たぐひなし」

——光源氏にとっての「たぐひなし」の独自性——

泉屋 咲月

はじめに

「たぐひなし」とは、比べられるものがないほどにすばらしいさまを表す表現であり、ある人物が別の人物を評価する際に用いられた場合、それは絶対的賛美を表すことになる。

『源氏物語』において、光源氏がこの表現を用いる対象が藤壺と紫の上に限られることは、すでに高橋早苗氏⁽²⁾によって指摘されている。このことを踏まえ、拙稿「光源氏にとっての「たぐひなし」——紫の上へのまなざし⁽³⁾」では、光源氏にとっての藤壺と紫の上の価値について論じ、光源氏の付与する「たぐひなし」は、紫の上に用いられる際にはその絶対性が失われ、光源氏にとっての「たぐひなき」人が藤壺であることを顕在化させると指摘した。そして、光源氏の「たぐひなし」をたどることで、紫の上へ藤壺を投影する光源氏のまなざしが無意識の領域に陥っていくさまが明らかになると述

べた。

本稿では、ある人物が別の人物を評価する際の「たぐひなし」について、『源氏物語』全体を通じた考察を試みる。そのうえで、光源氏の付与する「たぐひなし」の独自性を明らかにしたい。先に述べたとおり、光源氏の付与する「たぐひなし」については、前述の拙稿において詳しく論じた。本稿では、光源氏以外の人物の付与する「たぐひなし」の特徴について考察し、それらの中に光源氏による「たぐひなし」を位置づけたいと考える。

『源氏物語』において、ある人物がほかの人物を「たぐひなし」と捉える用例は三十五例認められる。以下に全用例を示す。⁽⁴⁾

- ① 弘徽殿女御↓弘徽殿腹の宮達、桐壺①・四四
- ② 光源氏↓藤壺、桐壺①・四九
- ③ 空蟬↓光源氏、帚木①・一〇一
- ④ 六条御息所↓光源氏、夕顔①・一四七

- ⑤ 天の下の人↓光源氏、夕顔①・一八一
- ⑥ 語り手↓光源氏、若紫①・二二三
- ⑦ 若人ども↓光源氏、末摘花①・二八四
- ⑧ 光源氏↓藤壺、賢木②・一一〇
- ⑨ 老女房たち↓光源氏、賢木②・一三七
- ⑩ 光源氏↓紫の上、須磨②・一七三
- ⑪ 語り手↓明石姫君、滯標②・二九〇
- ⑫ 光源氏↓藤壺、朝顔②・四二九
- ⑬ 右近↓光源氏・紫の上、玉鬘③・一一四
- ⑭ 光源氏↓紫の上、初音③・一四五
- ⑮ 玉鬘↓冷泉帝、行幸③・二九一
- ⑯ 玉鬘↓冷泉帝、行幸③・二九一
- ⑰ 光源氏↓紫の上、若菜上④・八七
- ⑱ 光源氏↓紫の上、若菜上④・八九
- ⑲ 柏木↓女三の宮、若菜上④・一三六
- ⑳ 光源氏↓紫の上 若菜下④・二〇五
- ㉑ 柏木↓女三の宮、若菜下④・二二〇
- ㉒ 女三の宮↓光源氏、若菜下④・二四三
- ㉓ 夕霧↓紫の上、御法④・五一〇
- ㉔ 致仕の大臣↓紫の上、御法④・五一四
- ㉕ 按察大納言↓娘、紅梅⑤・四五
- ㉖ 按察大納言↓光源氏、紅梅⑤・四八

- ㉗ 玉鬘の息子↓冷泉院、竹河⑤・七八
- ㉘ 匂宮↓中の君、総角⑤・二八〇
- ㉙ 中の君↓匂宮、総角⑤・二八四
- ㉚ 今上帝↓女一の宮、宿木⑤・三七四
- ㉛ 語り手↓薫、宿木⑤・四八三
- ㉜ 女房↓中の君、東屋⑥・七一
- ㉝ 匂宮↓浮舟、浮舟⑥・一三二
- ㉞ 侍従↓薫、浮舟⑥・一五九
- ㉟ 薫↓匂宮、蜻蛉⑥・二二一

以上三十五例が、『源氏物語』において、ある登場人物から別の登場人物へ付与される「たぐひなし」の用例である。これらの「たぐひなし」について、光源氏への「たぐひなし」、冷泉帝（院）への「たぐひなし」、女三の宮への「たぐひなし」、紫の上への「たぐひなし」、第三部における「たぐひなし」に分けて考えることとする。

一 光源氏への「たぐひなし」

光源氏がある人物から「たぐひなし」と捉えられる用例は八例（③⑦、⑨、②②、②⑥）認められる。^⑤本節では、用例②②と②⑥を除いた六例を考察する。②②に関しては、女三の宮への「たぐひなし」（①⑨、

②①」とともに後述する。また、②⑥に関しては、第三部における「たぐひなし」として言及する。

まず、光源氏の「たぐひなき」美貌が「ゆゆしき」を喚起している二例(⑤、⑥)に着目したい。

⑤ 天の下の人↓光源氏

まことに、臥したまひぬるままにいたく苦しがりたまひて、二三日になりぬるに、むげに弱るやうにしたまふ。内裏にも聞こしめし嘆くこと限りなし。御祈禱方々に隙なくのしる。祭祓、修法など言ひつくすべくもあらず。世にたぐひなくゆゆしき御ありさまなれば、世に長くおはしますまじきにやと、天の下の人の騒ぎなり。

(夕顔①・一八一～一八二)

⑥ 語り手↓光源氏

頭中将、懷なりける笛とり出でて、吹きすましたり。弁の君、扇はかなうち鳴らして、「豊浦の寺の西なるや」とうたふ。人よりはことなる君たちを、源氏の君いいたううちなやみて、岩に寄りゐたまへるは、たぐひなくゆゆしき御ありさまにぞ、何ごとにも目移るまじかりける。

(若紫①・二二三)

『源氏物語』において、すぐれた美しさを表す「ゆゆし」は、その半数が光源氏に対して用いられ、それ以外も皇族の系譜に属して

いる者に多く用いられることが指摘されている⁽⁶⁾。また、高橋氏は、正編における「たぐひなし」の対象が光源氏と冷泉帝に限られていることに關して、「皇統の系譜に連なる光源氏一族の証としても解釈しうる」とする。細野はるみ氏は⁽⁸⁾、『源氏物語』における「ゆゆし」について、幼い時に多く用いられること、美貌などの「生得的に持っているもの」に対する評価であると指摘した。これらの指摘をふまえ、次の明石姫君への「たぐひなし」(⑪)を見る。

⑪ 語り手↓明石姫君

入道待ちとり、喜びかしこまりきこゆること限りなし。そなたに向きて拝みきこえて、ありがたき御心ばへを思ふに、いよいよいたはしう、恐ろしきまで思ふ。児のいとゆゆしきまでうつくしうおはすることたぐひなし。げに、賢き御心にかしづききこえむとおぼしたるはむべなりけり、と見たてまつるに、あやしき道に出で立ちて、夢の心地しつる嘆きもさめにけり。いとうつくしうらうたうおぼえてあつかひきこゆ。

(滯標②・二九〇)

ここでも、用例⑤、⑥の場合と同様に、対象(ここでは明石姫君)の容貌が称賛されている。「たぐひなし」が「ゆゆし」とともに用いられるとき、皇統の系譜に関わる美貌を称賛するものとして機能すると思われる。

次に挙げる用例⑨では、「ねびまさる」光源氏が老女房たちによって「たぐひなし」と称揚される。この用例では「ゆゆし」が用いられることはない。しかし「たぐひなし」を付与する人物に着目すると、「老いしらへる人」という漠然とした立場は、⑤の「天の下の人」や⑥の語り手に通じるものがある。このように漠然とした第三者的視点から礼賛されることで、光源氏の理想性が呈示されている。

⑨老女房たち↓光源氏

「さもたぐひなくねびまさりたまふかな。心もとなきところなく世に榮え、時にあひたまひし時は、さる一つものにて、何につけてか世を思し知らむ、と推しはかられたまひしを、今はいという思ししづめて、はかなきことにつけても、ものあはれなる気色さへ添はせたまへるは、あいなう心苦しうもあるかな」など、老いしらへる人々うち泣きつめできこゆ。

(賢木②・一三六―一三七)

次いで、女君が光源氏を「たぐひなし」と評する用例③、④について考える。以下に、空蟬から光源氏への「たぐひなし」の用例③を挙げる。

③空蟬↓光源氏

かくおし立ちたまへるを深く情なくうしと思ひ入りたるさまも、

げにいとほしく心恥づかしきはひなれば、「(略)おのづから聞きたまふやうもあらむ、あながちなるすき心は、さらにならはぬを、さるべきにや、げにかくあはめられたてまつるもことわりなる心まどひを、みづからもあやしきまでなむ」など、まめだちてよろづにのたまへど、いとたぐひなき御ありさまの、いよいようちとけきこえむことわびしければ、すくよかに心づきなしとは見えたてまつるとも、さる方の言ふかひなきにて過ぐしてむと思ひて、つれなくのみもてなしたり。

(帚木①・一〇一)

③は、空蟬の寝所へ光源氏が侵入し、強引に契る場面である。ここで着目したいのは、光源氏の強引な侵入を「いとあさまし」(帚木①・一〇一)、「深く情けなくうし」と捉えているにも関わらず、光源氏を「たぐひなし」と評する点である。そうした光源氏の「たぐひなさ」は、空蟬の「わびし」という心情を引き起こし、「つれなさ」を導く。次に引用したように、この構図はこの場面以降たびたび描かれる。

・心の中には、いとかく品定まりぬる身のおぼえならで、過ぎにし親の御けはひとまれる古里ながら、たまさかにも待ちつけたてまつらば、をかしうもやあらまし、しひて思ひ知らぬ顔に見消つも、いかほど知らぬやうに思すらむ、と心ながらも胸い

たく、さすがに思ひ乱る。とてもかくても、今は言ふかひなき宿世なりければ、無心に心づきなくてやみなむ」と思ひはてたり。

(帚木①・一一一)

・女も並々ならずかたはらいたしと思ふに、御消息も絶えてなし。思し懲りにけると思ふにも、やがてつれなくてやみたまひしかばうからまし、しひていとほしき御ふるまひの絶えざらむもうたてあるべし。よきほどにて、かくて閉ぢめてんと思ふものから、ただならずながめがちなり。

(空蟬①・一一七―一一八)

空蟬は、反実仮想を繰り返しながら、光源氏を拒絶していくほかない身の上を嘆く。もちろん、仮に空蟬が光源氏を「たぐひなし」と捉えなかったとしても、空蟬が人妻であることや光源氏との間に決定的な身分差を抱えていることは覆らない。しかし、空蟬が自身の「身の上」や光源氏の「御ふるまひ」を厭わしく思いつつも、光源氏その人を疎んじることがないのは、光源氏を「たぐひなし」と捉えたことと少なからず関連していよう。

次に引用したのは、六条御息所から光源氏への「たぐひなし」の用例(④)である。

④六条御息所↓光源氏

女は、いとものをあまりなるまで思ししめたる御心ざまにて、齢のほども似げなく、人の漏り聞かむに、いとどかくつらき御夜離れの寢覚め寢覚め、思ししをるること、いとさまざまなり。霧のいと深き朝、いたくそのかされたまひて、ねぶたげなる気色にうち嘆きつつ出でたまふを、中将のおもと、御格子一間上げて、見たてまつり送りましたまへとおぼしく、御几帳ひきやりたれば、御頭もたげて見出だしたまへり。前栽の色々乱れたるを、過ぎがてにやすらひたまへるさま、げにたぐひなし。

(夕顔①・一四七)

この場面では、光源氏を見送る朝の様子が描かれる。光源氏の夜離れに思いつめる日々を過ごしながらも、実際に光源氏を目にすれば「たぐひなし」と思わずにはいられないのであった。

女君たちは、光源氏を「たぐひなし」と捉えることで、本来なら恨むべきふるまいを許してしまうのである。用例⑦もまた、光源氏がその「たぐひなさ」を理由に許される例として挙げられよう。

⑦若人ども↓光源氏

いとかかるも、さま変はり、思ふ方ことにものしたまふ人にやとねたくて、やを押し開けて入りたまひにけり。命婦、あなうたて、たゆめたまへる、いとほしければ、知らず顔にてわが方へ往にけり。この若人ども、はた、世にたぐひなき御あり

さまの音聞きに罪ゆるしきこえて、おどろおどろしうも嘆かれず、ただ、思ひもよらずにはかにて、さる御心もなきをぞ思ひける。

(末摘花①・二八四)

この場面において、光源氏の「たぐひなさ」は女房に光源氏の侵入を許させ、末摘花と契る展開を導く。このように、光源氏の「たぐひなさ」によって女君との関係が導かれるという点に関しては、用例⑥についても同様のことが言える⁽⁹⁾。

光源氏への「たぐひなし」は、物語の随所で光源氏の理想性や美質を呈示する。また、女君たちとの関わりにおいては、光源氏を誰かに許させることで、光源氏に対する思慕を描いたり、光源氏と女君との関係を進展させたりするのである。

二 冷泉帝(院)への「たぐひなし」

冷泉帝(院)への「たぐひなし」は全部で三例(⑮、⑯、⑳)認められる。以下に本文を挙げる。

⑮⑯玉鬘↓冷泉

西の対の姫君も立ち出でたまへり。そこばくいどみ尽くしたまへる人の御容貌ありさまを見たまふに、帝の、赤色の御衣奉りてうるはしう動きなき御かたはら目に、なずらひきこゆべき人

なし。わが父大臣を、人知れず目をつけたてまつりたまへど、きらきらしうものきよげに盛りにはものしたまへど、限りありかし。いと人にすぐれたるただ人と見えて、御輿の中よりほかに、移るべくもあらず。まして、容貌ありや、をかしやなど、若き御達の消えかへり心移す中少将、何くれの殿上人やうの人は、何にもあらず消えわたれるは、さらにたぐひなうおはしますなりけり。源氏の大臣の御顔さまは、別物とも見えたまはぬを、思ひなしのいますこしいつかしう、かたじけなくめでたきなり。さは、かかるたぐひはおはしがたかりけり。あてなる人は、みなものきよげにけはひことなべいものとのみ、大臣、中将などの御にほひに目馴れたまへるを、出で消えどものかたはなるにやあらむ、同じ目鼻とも見えず、口惜しうぞ圧されたるや。兵部卿宮もおはす。右大将のさばかり重りかによしめくも、今日の装ひいとなまめきて、胡籙など負ひて仕うまつりたまへり、色黒く鬚がちに見えて、いと心づきなし。いかでかはつくるひたてたる顔の色あひには似たらむ、いとわりなきことを、若き御心地には見おとしたまうてけり。

(行幸③・二九〇～二九二)

⑳玉鬘の息子↓冷泉院

尚侍の君、かくおとなしき人の親になりたまふ御年のほど思ふよりはいと若うきよげに、なほ盛りの御容貌と見えたまへり。

冷泉院の帝は、多くは、この御ありさまのなほゆかしう昔恋しう思し出でられければ、何につけてかはと思しめぐらして、姫君の御事を、あながちに聞こえたまふにぞありける。院へ参りたまはんことは、この君たちぞ、「なほもののはえなき心地こそすれ。よろづのこと、時につけたるをこそ、世人もゆるすめれ。げにいと見たてまつらまほしき御ありさまは、この世にたぐひなくおはしますめれど、盛りならぬ心地ぞするや。琴笛の調べ、花鳥の色をも音をも、時に従ひてこそ、人の耳にもとまるものなれ、春宮はいかが」など申したまへば、「いさや、はじめよりやむごとなき人の、かたはらなきやうにてのみのしたまふめればこそ。なかなかにてまじらはむは、胸いたく人笑へなることもやあらむとつましければ。殿おはせしかば、行く末の御宿世宿世は知らず、ただ今はかひあるさまにもてなしたまひてましを」などのたまひ出でて、みなものあはれなり。

(竹河⑤・七七―七八)

これらを見ると、冷泉帝(院)が「たぐひなし」と評されるとき、かならず玉鬘が関わってくることに気づく。

用例⑮と⑯は、ともに大原野行幸に際して玉鬘が物見車から冷泉帝を見る場面である。冷泉帝を見た玉鬘は、作中で幾度となく「たぐひなし」と評される光源氏さえもさしおいて、冷泉帝を「たぐひなし」と称賛するのである。

大原野行幸における玉鬘の男性を評価するまなざしには、「ある種の近代性」⁽¹⁰⁾や鬚黒と結びつく必然性、さらには玉鬘や大原野という場の異界性⁽¹²⁾が読み取られてきた。また、冷泉帝を「たぐひなし」と礼賛するのは対照的に鬚黒を嫌悪する当該場面の構図には、鬚黒との結婚という構想が意識されているとも言われる。⁽¹³⁾

いずれにせよ、この場面で冷泉帝を「たぐひなし」と捉えたことで「馴れ馴れしき筋などをばもて離れて、おほかたに仕うまつり御覧ぜられんは、をかしうもありなむかし」(行幸③・二九二)として、玉鬘が宮仕えに心を動かしたことは明らかであろう。

用例⑳は、竹河巻において、玉鬘の娘・大君の院参を望む冷泉院に対する玉鬘の息子たちからの「たぐひなし」である。玉鬘の息子たちは、冷泉院の「いと見たてまつらまほしき御ありさま」を「たぐひなし」と捉えている。ここで留意したいのは、「いと見たてまつらまほしき」の直前にある「げに」である。玉鬘の息子たちは、冷泉院の美質を「げに」と受けながらも「盛りならぬ心地ぞするや」とし、「春宮はいかが」と結ぶ。これに対し玉鬘は「いさや」と返し、春宮への参内には否定的である。要するに、ここで冷泉院を「たぐひなし」と評するのは玉鬘の息子たちであるが、実質的に冷泉院を「たぐひなし」としているのは玉鬘なのである。

当然のことながら、玉鬘が大君参院を決意した背景には、冷泉院への思慕と同時に政治的な要因も考えなくてはなるまい。⁽¹⁴⁾しかしながら、「たぐひなし」という表現から行幸巻と竹河巻を考えると、

両巻の展開には玉鬘と冷泉帝（院）の関係が深く関わってくるのがわかる。

行幸巻で冷泉帝を「たぐひなし」と見たことで玉鬘は出仕し、冷泉帝と対面を果たす。その対面以降玉鬘に思いをよせる冷泉帝は、玉鬘の娘・大君を所望する。そして、玉鬘に大君の参院を決意させたのは、冷泉院への「たぐひなし」であった。冷泉帝（院）が「たぐひなし」と評されるとき、玉鬘は自身の出仕や娘・大君の院参といった決断をし、物語の展開を導くのであった。

三 女三の宮への「たぐひなし」

物語正篇において「たぐひなし」と評される女君は、藤壺と紫の上以外では女三の宮に限られる。そして、女三の宮に「たぐひなし」を付与するのは二例（⑭、⑳）とも柏木である。

⑭ 柏木↓女三の宮

衛門督の君も、院に常に参加し、親しくさぶらひ馴れたまひし人なれば、この宮を父帝のかしづきあがめたてまつりたまひし御心おきてなどくはしく見たてまつりおきて、さまさまの御定めありしころほより聞こえ寄り、院にもめざましとは思しのたまはせずと聞きしを、かく異ざまになりたまへるは、いと口惜しく胸いたき心地すれば、なほえ思ひ離れず。そのをりより

語らひつきにける女房のたよりに、御ありさまなども聞き伝ふるを慰めに思ふぞ、はかなかりける。「対の上の御けはひには、なほ圧されたまひてなむ」と、世人もまねび伝ふるを聞きては、かたじけなくとも、さるものは思はせてまつらざらまし、げにたぐひなき御身にこそあたらずらめ、と常にこの小侍従と言ふ御乳主を言ひはげまして、世の中定めなきを、大殿の君もとより本意ありて思しおきてたる方におもむきたまはばとたゆみなく思ひ歩きけり。

（若葉上④・一三五―一三六）

⑲ 柏木↓女三の宮

「いで、あな聞きにく。あまりこちたくものをこそ言ひなしたまふべけれ。世はいと定めなきものを、女御、后もあるやうありてものしたまふたぐひなくやは。まして、その御ありさまよ、思へばいとたぐひなくめでたけれど、内々は心やましきことも多かるらむ。院の、あまたの御中に、また並びなきやうにならはしきこえたまひしに、さしも等しからぬ際の御方々にたちまじり、めざましげなることもありぬべくこそ。いとよく聞きはべりや。世の中はいと常なきものを、一際に思ひ定めて、はしたなくつききりなることなのたまひそよ」とのたまへば、（後略）

（若葉下④・二二〇）

⑲は、六条院において紫の上に圧されがちであると聞いて、自分

ならそんな思いはさせまいとして、小侍従に訴える場面。②は、落葉宮を妻に迎えるも女三の宮を諦められない柏木が、女三宮について小侍従と語る場面である。

柏木の女三の宮に対する「たぐひなし」という評価は、女三の宮の身分、すなわち朱雀院鍾愛の皇女であり准太政天皇・光源氏の正妻であることに深く関わっていることがわかる。柏木による女三宮に対する「たぐひなし」が「等しからぬ際の御方々」、六条院の女君たちに対する「めざまし」へとつながることも注目される。

ここで、以下に引用する女三宮による光源氏への「たぐひなし」の用例(②②)を見ておく。

②② 女三の宮↓光源氏

院をいみじく怖ぢきこえたまへる御心に、ありさまも人のほども等しくだにやはある。いたくよしめき、なまめきたれば、おほかたのひと目にこそ、なべての人にはまさりてめでらるれ、幼くよりさるたぐひなき御ありさまにならひたまへる御心には、めざましくのみ見たまふほどに、かく悩みわたりたまふは、あはれなる御宿世にぞありける。

(若菜下④・二四三)

紫の上の危篤と蘇生、その後の小康、紫の上の看病につき六条院へ寄り付かない光源氏が語られる。その一方で、光源氏不在の六条院において、柏木と密通した女三の宮がおそれおのくさまが描か

れる。密通を嘆く女三の宮によって「たぐひなし」とされるのは光源氏であり、光源氏を「たぐひなし」と捉える女三の宮にとって、柏木は「めざましくのみ」見える。柏木が女三の宮を「たぐひなし」と捉える基準、すなわち身分に起因する基準で捉えたとき、女三の宮にとって柏木は「めざましき」人なのであった。

用例②②の直後の場面で、柏木からの文が発見されたことで、女三の宮の密通が光源氏に露見する。その際の光源氏の女三の宮に対する心情は次のようなものであった。

あないはけな、かかる物を散らかしたまひて、我ならぬ人も見つけたらましかば、と思すも、心劣りして、さればよ、いとむげに心にくきところなき御ありさまをうしろめたしとは見るかし、と思す。

(若菜下④・二五〇～二五一)

光源氏は女三の宮に対し、「心劣りし」、「心にくきところなき御ありさま」と評するのである。こうして見たとき、柏木から女三の宮への「たぐひなし」と女三の宮から光源氏への「たぐひなし」は、それぞれ礼賛する相手に見下されるという皮肉な様相を呈している。

柏木と女三の宮の密通に関しては、表現において光源氏と藤壺の密通に通じるものがあると指摘されてきた。⁽¹⁵⁾ また、日向一雅氏は、光源氏と藤壺、柏木と女三の宮それぞれの立場や関係、少年時代の恋を端緒とする点などに共通性を見いだす。とりわけ、藤壺の形代

である紫の上に関する描写と女三の宮の形代である唐猫に関する描写に、表現上の類似性を認める。これらの先行研究に指摘されるとおり、柏木と女三の宮の関係には、光源氏と藤壺の関係の再現を読み取ることができるだろう。

しかしながら、光源氏の藤壺に対する「たぐひなし」と柏木の女三の宮への「たぐひなし」は、それぞれまったく異質なものであった。光源氏が藤壺を「たぐひなし」と評するとき、柏木と女三の宮の場合のような礼賛する対象に見下される構図は描かれない。また、日向氏⁽¹⁷⁾の指摘する形代の問題に関しても、藤壺に対する「たぐひなし」を紫の上への「たぐひなし」へと転位させていく光源氏と女三の宮のみに「たぐひなし」を用いて完結してしまう柏木は大きく異なるだろう。

四 紫の上への「たぐひなし」

最後に、紫の上に対する光源氏以外からの「たぐひなし」(23、24)について見ていきたい。

23 夕霧↓紫の上

御髪のだうちやられたまへるほど、こちたくけうらにて、つゆばかり乱れたるけしきもなう、つやつやとうつくしげなるさまぞ限りなき。灯のいと明かきに、御色はいと白く光るやうに

て、とかくうち紛らはすことありし現の御もてなしよりも、言ふかひなきさまに、何心なくて臥したまへる御ありさまの、飽かぬところなしと言はむもさらなりや。なのめにだにあらず、たぐひなきを見たてまつるに、死に入る魂のやがてこの御骸にとまらなむとおもほゆるも、わりなきことなりや。

(御法④・五一〇)

24 致仕の大臣↓紫の上

致仕の大臣、あはれをもをり過ぐしたまはぬ御心にて、かく世にたぐひなくものしたまふ人のはかなく亡せたまひぬることを、口惜しくあはれにおぼして、いとしば問ひきこえたまふ。

(御法④・五一四)

紫の上に光源氏以外の人物から「たぐひなし」が付与されるのは、いずれもその死後のことである。24の「たぐひなし」は、致仕の大臣の弔問を導き、直後に葵の上死去が思い起こされることが紫の上の死を惜しむ「世人」の描写と相俟って、六条院における紫の上の重要性を示す。

一方、23の夕霧からの「たぐひなし」は、紫の上の姿態が詳細に描写される点において、光源氏からの「たぐひなし」と類似しており、24の場合とは異なる印象を受ける。また、紫の上が夕霧によってその姿をありありと見られてしまうこの場面は、野分巻の垣間見

を彷彿とさせる。野分巻の夕霧は、早くに伊藤博氏⁽¹⁸⁾によって「視点人物」であることが指摘され、紫の上を垣間見ることに關しては「(密通)の可能態の物語」⁽¹⁹⁾や「近親相姦的なイメージ」⁽²⁰⁾として捉えられながらも、結局「認識者」⁽²¹⁾あるいは「見る人」⁽²²⁾に終始してしまう夕霧のあり方が指摘されてきた。結局のところ、夕霧は、紫の上の最期にあたってもその死顔を見るだけに留まったのである。

しかし、ここで言及したいのは、そうした夕霧のあり方ではない。なぜ光源氏でなく夕霧が紫の上の死に際して「たぐひなし」を付与する役割を担うのかということである。これまで、紫の上をその傍らで見つめ、「たぐひなし」と評してきたのは光源氏のみであった。それにもかかわらず、紫の上の最期に際して、その姿をまじまじと見つめ、「たぐひなし」と評するのがなぜ夕霧であるのか⁽²³⁾。

光源氏が紫の上にこれまで付与してきた「たぐひなし」と、この場面で夕霧が付与する「たぐひなし」との違いとはいったいなにか。それは、光源氏からの「たぐひなし」は生きている紫の上に用いられ、夕霧からの場合は死んでいる紫の上に用いられることであろう。

思えば、光源氏が紫の上を「たぐひなし」と称賛するとき、紫の上は常に何かを考え、それに基づき行動していた⁽²⁴⁾。光源氏は、そうした「生きた」紫の上に対して「たぐひなし」を用いていたのではなかったか。こうした点から、紫の上の死顔が光源氏ではなく夕霧によって「たぐひなし」と捉えられることを考える際、北山での垣間見場面⁽²⁵⁾における紫の上の登場時の躍動感⁽²⁶⁾にも留意する必要がある。

う。

五 第三部における「たぐひなし」

最後に、物語第三部における「たぐひなし」を見てみたい。第三部における「たぐひなし」は、高橋氏⁽²⁷⁾によって「比類なさが称えられた直後に、それに匹敵するあるいは超える人物のいる可能性が示される」特徴がすでに指摘されており、稿者もそれに従いたい。

以下に、第三部における「たぐひなし」(用例⁽²⁸⁾25、26、28、35)の本文を挙げるとともに、高橋氏⁽²⁹⁾の指摘する、「たぐひなし」と捉えられる人物(波線を付した)とそれに匹敵もしくは勝る人物(二重傍線を付した)が示される用例(25、30、32、33、34、35)の本文を挙げる。

②⑤ 按察大納言↓娘

わが御姫君たちを人に劣らじと思ひおこれど、「この君にえしもまさらずやあらむ。かかればこそ、世の中の広き内裏はわづらはしけれ。たぐひあらじと思ふにまさる方もおのづからありぬべかめり」など、いとどいぶかしう思ひきこえたまふ。

(紅梅⑤・四五)

③④ 今上帝↓女一の宮

そのころ、藤壺と聞こゆるは、故左大臣殿の女御になむおはしける、(中略)ただ女宮一ところをぞ持ちたてまつりたまへりける。(中略)御容貌もいとをかしくおはすれば、帝もらうなきものに思ひきこえさせたまへり。女一の宮を、世にたぐひなきものにかしづきこえさせたまふに、おほかたの世のおほえこそ及ぶべうもあらね、内々の御ありさまはさをさ劣らず、(後略)

(宿木⑤・三七三―三七四)

③② 女房↓中の君

額髪などのいたう濡れたるをもて隠して、灯の方に背きたまへるさま、上をたぐひなく見たてまつるに、け劣るとも見えず、あてにをかし。

(東屋⑥・七一)

③③ 匂宮↓浮舟

紛ることなくのどけき春の日に、見れども飽かず、そのことごとおぼゆる限なく、愛敬づき、なつかしくをかしげなり。さるは、かの対の御方には劣りたり、大殿の君の盛りにほひたまへるあたりにては、こよなかるべきほどの人を、たぐひなう思さるるほどなれば、また知らずをかしとのみ見たまふ。

(浮舟⑥・一三二)

③④ 侍従↓薫

これかれと見るもいとうたてあれば、なほ言多かりつるを見つつ臥したまへれば、侍従、右近見あはせて、「なほ移りにけり」など、言はぬやうにて言ふ。「ことわりぞかし。殿の御容貌を、たぐひおはしまさじと見しかど、この御ありさまはいみじかりけり。うち乱れたまへる愛敬よ、まろならば、かばかりの御思ひを見る見る、かくてあらじ。後の宮にも参りて、常に見たてまつりてむ」と言ふ。

(浮舟⑥・一五八―一五九)

③⑤ 薫↓匂宮

いみじくも思したりつるかな、いとはかなりけれど、さすがに高き人の宿世なりけり、当時の帝、後のさばかりかしづきたてまつりたまふ親王、顔容貌よりはじめて、ただ今の世にはたぐひおはせざめり、見たまふ人とても、なのめならず、さまざまにつけて限りなき人をおきて、これに御心を尽くし、世の人立ち騒ぎて、修法、読経、祭、祓と、道々に騒ぐは、この人を思すゆかりの御心地のあやまりにこそはありけれ、我も、かばかりの身にて、時の帝の御むすめをもちたてまつりながら、この人のらうたくおぼゆる方は劣りやはしつる、(後略)

(蜻蛉⑥・二二一―二二二)

これらが高橋氏の指摘する、誰かを「たぐひなし」としながらもそれに匹敵するあるいは勝る人物が呈示される用例である。たしか

に、こうした用法は第三部においては圧倒的な割合を占める。ただ、この用法は物語正編にも認められる。次に挙げる二例(①、⑬)がそれに該当する。

① 弘徽殿女御↓弘徽殿腹の宮達

世にたぐひなしと見たてまつりたまひ、名高うおはする宮の御容貌にも、なほにほはしさはたとへむ方なく、うつくしげなるを、世の人光る君と聞こゆ。藤壺ならびたまひて、御おぼえもとりどりなれば、かかやく日の宮と聞こゆ。(桐壺①・四四)

⑬ 右近↓光源氏・紫の上

明けぬれば、知れる大徳の坊に下りぬ。物語心やすくなるべし。姫君の、いたくやつれたまへる恥づかしげに思したるさま、いとめでたく見ゆ。「(中略)殿もすぐれたりと思したるを、言に出では、何かは数への中には聞こえたまはむ。『我に並びたまへるこそ、君はおほけなけれ』となむ戯れきこえたまふ。見たてまつるに命延ふる御ありさまどもを、またさるたぐひおはしましなむや、となむ思ひはべるに、いづくか劣りたまはむ。

(後略)

(玉鬘③・一一三―一一四)

①では光源氏が、⑬では玉鬘が、それぞれ「たぐひなき」人物に勝るもしくは匹敵する人物として挙げられている。たしかに、物語

正編におけるこうした用法の例は第三部に比して圧倒的に少ない。しかし、①が最初の用例でありながら「たぐひなし」という評価を相対化してしまっている点、⑬ではそれまで再三にわたり「たぐひなし」と評されてきた光源氏(と紫の上)が相対化されている点には留意すべきであろう。

最後に、第三部における先に引用したものを除く用例(②⑥、②⑨、③①)を見ておく。

②⑥ 按察大納言↓光源氏

「あはれ、光る源氏といはゆる御さかりの大将などにおはせしころ、童にてかやうにてまじらひ馴れきこえしこそ、世とともに恋しうはべれ。この宮たちを世人もいとことに思ひきこえ、げに人にめでられんとなりたまへる御ありさまなれど、端が端にもおぼえたまはぬなほたぐひあらじと、思ひきこえし心のなしにやありけん。(後略)

(紅梅⑤・四八)

②⑧ 匂宮↓中の君

いみじくをかしげに盛りと見えて、ひきつくろひたまへるさまは、ましてたぐひあらじはやおぼゆ。さばかりよき人を多く見たまふ御目にだに、けしうはあらず、容貌よりはじめて多く近まさりしたりと思さるれば、山里の老人どもは、まして口つき憎げにうち笑みつつ、(後略)

(総角⑤・二七九―二八〇)

②9 中の君↓匂宮

若き人の御心にしみぬべく、たぐひ少なげなる朝明の姿を見送_りて、なごりとまれる御移り香なども、人知れずものあはれなるは、ざれたる御心かな。今朝ぞ、もののあやめも見ゆるほどにて、人々のぞきて見たてまつる。「中納言殿は、なつかしく恥づかしげなるさまぞそひたまへりける。思ひなしのいま一際にや、この御さまは、いとことに」などめできこゆ。

(総角⑤・二八四―二七五)

③1 語り手↓薫

御盃まゐりたまふに、大臣しきりては便なかるべし、宮たちの御中に、はた、さるべきもおはせねば、大将に譲りきこえたまふを、憚り申したまへど、御気色もいかがありけん、御盃ささげて、「をし」とのたまへる声づかひもてなしさへ、例の公事なれど、人に似ず見ゆるも、今日はいとど見なしさへそふにやあらむ。さし返し賜りて、下りて舞踏したまへるほどいとたぐひなし。上臈の親王たち大臣などの賜りたまふだにめでたきことなるを、これは、まして、御婿にてもてはやされたてまつりたまへる、御おぼえおろかならずめづらしきに、限りあれば下りたる座に帰り着きたまへるほど、心苦しきまでぞ見えける。

(宿木⑤・四八二―四八三)

これらの用例では、ある人物が「たぐひなし」とされるとき、そこには何かと比較する視線（点線を付した）が伴われる。⁽³¹⁾このように、高橋氏⁽³²⁾が物語第三部に特徴的であるとする「たぐひなし」の用法は、物語正編にも認めることができるのである。

おわりに

以上に『源氏物語』における「たぐひなし」という称賛の表現が、光源氏以外を主体として用いられる例を見てきた。もちろん、用例数や主体となる人物およびその物語における重要性の相違をふまえると、光源氏による「たぐひなし」と単純に比較することには注意が必要であろう。しかし、これらの用例について、本稿で呈示したような分類で考えた際の特徴は、ひとまず示せたように思う。

こうした中に位置づけると、光源氏による「たぐひなし」という評価は、二人の対象に繰り返し用いられる点、一方の対象（藤壺）への思慕をもう一方の対象（紫の上）へと転位する点において、きわめて独自の用法であると言わざるをえない。

注

- (1) 『角川古語大辞典』四(角川書店、一九九四・二〇)には「たぐひなし」【類無】形ク 比べられるものがないほどであるさま。匹敵するものがないさま。多く、それほどにすばらしいさまをいう。」と記載されている。
- (2) 高橋早苗「『源氏物語』の「たぐひなし」―紫のゆかりの女君たちをめぐる―」(『中古文学』九〇、二〇一一・一一)。
なお、前稿(注3に掲出)と同様に、本稿に関しても高橋氏の論文に多大な示唆を受けた。
- (3) 拙稿「光源氏にとってのたぐひなし―紫の上へのまなざし―」(『立教大学日本文学』一一四、二〇一五・七)
- (4) 各用例には登場順に番号を付し、「たぐひなし」を付与する人物とその評価の対象となる人物の関係に関しては、「たぐひなし」を付与する人物↓「たぐひなし」を付与される人物」と表記した。また、『新編日本古典文学大系』(小学館)における本文該当箇所も示した。その際の表記は「(巻名、巻数・頁数)」とした。なお、以降で引用する本文も同書によるものとする。
- (5) 用例⑬に関しては、紫の上とともに「たぐひなし」の対象とされているため、光源氏のみが「たぐひなし」と評される用例とは分けて考えた。
- (6) 藤本勝義「ゆかり 超越の女君―玉鬘―」(『人物造型からみた『源氏物語』』鈴木日出男(編)、至文堂、一九九八年)。
- (7) 注2に同じ。
- (8) 細野はるみ「ゆゆしき」主人公像の転回―源氏物語須磨前後―」(『中古文学』四二、一九八八・一一)。
- (9) ⑥における光源氏の「たぐひなさ」は、次のような展開へつながる。「この若君、幼心地に、めでたき人かなと見たまひて、『宮の御ありさまよりもまさりたまへるかな』などのたまふ。『さらば、かの人の御子になりておはしませよ』よ聞こゆればうちうなづきて、いとうありなむと思したり。雖遊びにも、絵描いたまふにも、源氏の君と作り出でて、きよらなる衣着せかしづきたまふ。」(若紫①・二二四―二二五)
- (10) 沢田正子「大原野の行幸」(『講座源氏物語の世界』五、秋山虔ほか(編)、有斐閣、一九八一年)。
- (11) 平井仁子「玉鬘」(『物語を織りなす人々』源氏物語講座二、今井卓彌ほか(編)、勉誠社、一九九一年)。
- (12) 立石和弘「冷泉帝の顔―供儀と玉鬘の視線から―」(『中古文学』五七、一九九六・五)。立石氏は、大原野行幸に際しての玉鬘のまなざしのあり方について、「異郷訪問譚における身体と婚姻のあり方」から、「男性賛美の言葉を女性の側から投げかける禁忌の裏返しとして、異郷にのみ許された行為」であると述べる。
- (13) 竹田誠子「行幸巻の大原野行幸―その設定と物語的意義―」(『日本文学論究』四四、一九八五・一)。
- (14) 平林優子「竹河巻における玉鬘と冷泉院」(『東京女子大学日本文学』九三、二〇〇〇・三)。
- (15) 今西祐一郎「おほけなし」から「けしからず」へ―『浮舟』的状況―(『国文学』一七・一五、一九七二・一二)、池田節子「場面の反復―柏木物語の道後反復―」(『国語と国文学』七五・一一、一九九八・一一)。今西氏は「おほけなし」という表現に、柏木と女三の宮の密通と光源氏と藤壺の密通の共通性を見いだす。池田氏は「おほけなし」などの表現のほかにも、男

君の視点からの女君の描写や「死への志向」などの共通点を指摘する。

- (16) 日向一雅「柏木物語の方法―第一部の物語の諸設定との対比を軸にして―」（『源氏物語の探求』第一六輯、源氏物語探求会（編）、風間書房、一九九一年）。
- (17) 注16に同じ。
- (18) 伊藤博「『野分』の後―源氏物語第二部への胎動―」（『源氏物語の原点』明治書院、一九八〇年）。
- (19) 高橋亨「可能態の物語の構造―六条院物語の反世界―」（『源氏物語の対位法』東京大学出版会、一九八二年）。
- (20) 三谷邦明「野分巻における〈垣間見〉の方法―〈見ること〉と物語あるいは〈見ること〉の可能と不可能―」（『物語文学の方法Ⅱ』有精堂、一九八九年）。
- (21) 注19に同じ。
- (22) 注20に同じ。
- (23) なお、この場面における紫の上の死顔に関しての「なに心なし」という表現については、藤井貞和「光源氏物語主題論」（『源氏物語の始原と現在』、砂子屋書房、一九八〇年）、三田村雅子「源氏物語のジェンダー―『何心なし』と『うらなし』の裏側」（『解釈と鑑賞』六五・一二、二〇〇〇・一二）がある。
- (24) 冒頭で述べたとおり、光源氏から藤壺および紫の上への「たぐひなし」に関しては、前稿（注3に掲出）において詳しく論じたため、ここでは詳しく論じない。
- (25) 光源氏の「たぐひなし」に認められる、紫の上への藤壺の投影は、若紫巻における紫の上垣間見の場面にその端緒を認めることができることは、拙稿（注3に掲出）において指摘したと

おりである。

- (26) 原岡文子「『源氏物語』の子どもをめぐる―紫の上と明石の姫君をめぐる―」（『むらさき』三三、一九九五・一二）。
- 原岡氏は、紫の上の登場における、「走る」・「泣く」といった行為に「童子神」として「憤懣のエネルギー」や「秩序に組み込まれる前以前の原初の力」を負っているとする。
- (27) 注2に同じ。
- (28) 用例②7に関しては、第三節においてすでに本文を引用したため、本節で再度引用することはない。
- (29) 注2に同じ。
- (30) ②7、③1に関しては、高橋早苗氏（注2に掲出）によって、「たぐひなし」が限定的に用いられていることが指摘されている。
- (31) たとえば、⑩の光源氏から紫の上への「なほこころ見る中にたぐひなかりけり」という評価がこれに該当しよう。
- (32) 注2に同じ。

（いずみやさつき 大学院博士後期課程在学生）